

桜おう祠しに遊あそぶ

広ひろ瀬せ旭きよく荘そう

但たゞ見みる
双そう黄こう鳥ちやう
花はな開ひらけば
万ばん人にん集あつまり

緑りよく陰いん深ふかき
処ところに呼よぶを
花はな尽つくれば
一いち人にん無なし

【作者】広瀬旭荘(一八〇七〜一八六三年)江戸時代末期の漢詩人。豊後(大分県)日田の人。淡窓は二十五歳年上の兄。天保二年淡窓に代わつて咸宜園(かんぎえん)を統括し、その後天下を周遊し名流と交わつた。清の愈曲園(ゆきよくえん)は旭荘を日東第一の詩人と評した。

【語釈】*桜詞：桜の宮。今の大阪市都島区中野町三丁目にある神社で、天照大神と応神・仁徳両天皇を祀る。桜の名所である。
*双黄鳥：ひとつがいの鶯。

【通釈】桜の花が咲くと、何万とも知れぬ人達が花見に集まつてくるが、さて、いったん花が散つてしまうと、誰一人やつてこなくなる。ただ一つがいの雌雄の鶯だけが緑濃い葉桜の木陰で、呼び交わしているのである。